

# 建設会社、キジ養殖に挑む

県内で初めてキジ養殖を行ったとされるいの町本川地区で、消えかかっていた養殖の取り組みを地元の建設会社が受け継ぎ、ブランド化を目指している。

## 畑違いの地場産業受け継ぐ

1941年創業の「手箱建設」（いの町戸中）は2009年、新業種への参入を促す国の補助金を利用し、キジ養殖を始めた。不景気で公共工事の受注が落ち込み、「地域のためできることがあれば良かった」と山本周児社長（59）は話す。

とはいえ、キジ養殖は全くの未経験だった。地元生産組合に教わりながらノウハウを学んだ。ひとまず千羽を購入し、社員の川村英一さん（47）が飼育担当に就任した。

### 一羽一羽を観察

4〜5月は小屋で春先に生ま



手箱建設社長で本川手箱きじ生産企業組合理事長の山本周児さん=いの町戸中

## いの・本川地区

れたばかりのひなをガスストーブで温める。ストーブめがけて団子状に集まったひなが圧死するのを防ぐため、夜間は1カ月余り、2時間おきに見回る必要がある。

弱いキジが周りから攻撃され



キジの様子を見る飼育担当の川村英一さん=いの町葛原

るいじめもある。標的となったキジは別の小屋に避難させる必要がある。発見が遅れると死んでしまう。川村さんは毎日注意深く一羽一羽を観察する。

### 組合員4人だけ

14年、キジを養殖する地元企業らと旧組合を改名して「本川手箱きじ生産企業組合」を発足させた。翌15年から山本社長が

理事長を務めている。だが、高齢化などで組合員は減り、今では手箱建設の社員と地元住民の計4人のみになった。

「みんなやめるとは思ってたかった。けれど、やり始めたことやき。ブランドの知名度も上がってきたし、もうちょっと頑張らなあかん」

売り出すキジのブランド名は「土佐・本川 献上 手箱きじ」。近くの手箱山の氷室の水を土佐藩に献上していた、と地区に伝わることから名付けた。

現在飼育するキジは約4700羽。本社近くの計七つの小屋で飼育する。一つの小屋の広さは約150平方メートル。中にはキジが自由に飛び回れるように止まり木が並ぶ。エサにも気を使い、配合飼料の他にスイカやカボチャ、キュウリなどの野菜も与える。

キジたちは最大で1・4キロに成長し、年明けから解体作業が始まっている。鶏肉とは違う歯ごたえや味があり、クセがなく食べやすいのが特徴だ。川村さんは「お肉も、ガラで取ったスープもおすすぬ。皆さんに美味しいと言ってもらえたらうれしいです」と話した。（菅沢百恵）